

ブルー・レクイエム

2005(平成17)年6月14日鑑賞(東映試写室)



監督・脚本=ニコラ・ブークリエフ/出演=アルベール・デュポンテル/ジャン・デュジャルダン/フランソワ・ベルレアン/クロード・ペロン/ジュリアン・ボワッスリエ/フィリップ・ローデンバック/オーレ・アッティカ (バップ、ロングライド配給/2003年フランス映画/95分)

……一風変わった(?) ペシミスティックなフランスものの犯罪映画を「フレンチ・フィルムノワール」というらしいが、これはその最新の代表作。舞台は現金輸送車とその現金輸送会社だが、なぜそこが舞台となったのか? そして主人公は一体何を目標しているのか……? 主人公に絡むさまざまな人物は、誰が味方で誰が敵なのか? 観ていて結構しんどい映画だが、最後のハイライトシーンは圧巻。テーマはやっぱり単純だったんだ……?

フレンチ・フィルムノワールとは?

この映画は解説を読むまでもなく、フランスの犯罪モノ映画だが、ハリウッド映画とは明らかに異質でフランス人気質(フランス人の頑固さ?) を実感させるもの……?

フランスの犯罪モノ映画の主人公はもちろん男だが、そこに何よりも共通するのは、主人公の「寡黙」さ。「男は黙って……」というルールは、フランスのこの手の映画では絶対に守らなければならないものなのだろう。

しかし、パンフレットを読んでわかったのは、こんな映画を「フレンチ・フィルムノワール」と呼ぶのだということ。

フレンチ・フィルムノワールとは、映画史的には、1940年代~1950年代に登場したペシミスティックなハリウッドの犯罪スリラーを指すとのことだが、その詳しい解説はパンフレットにある、森直人氏の「狂い咲きしたフレンチ・フィルムノワールの醍醐味」を勉強してもらいたい。

ショッキングな冒頭シーン

映画の冒頭は、明らかに現金輸送車とわかる車が田舎道を走っていくシーンから。車の中には運転手を含めて3人の男が乗っているが、彼らの会話の内容がたわいのない音楽談議であることは、ポール（マッカートニー）やリンゴ（スター）の名前が出てきたり、「あの年になってロックをやっているミックはすごい」という会話から、あのビートルズやローリングストーンの話であることは私にもわかる。しかし、ドリー・バートンという名前の歌手は、残念ながら私は知らない……？

現金輸送って、こんな雑談をしながらできる仕事ではないはずだが……と思いつつながら観ていると、この車の後ろを走ってきた1台のBMWがこれを追い越そうとしてイライラ状態……。それをバックミラーで見た現金輸送車の運転手は、ちょっと様子がおかしいと思って本部に連絡をとろうとしたところ、現金輸送車がドカンと爆発・炎上。これがいきなりだから、思わずビックリ！ こりゃ心臓に悪い。そして次の場面は全く別のものに……。短い冒頭シーンながら最初の「つかみ効果」は十分だし、映画の中盤でこの現金輸送車の爆発・炎上シーンが大きな意味を持っていることがわかってくるが……？

主人公はなぜヴィジラント社に……？

冒頭シーンの終了後、主人公アレックス・ドゥマール（アルベール・デュポンテル）は現金輸送会社であるヴィジラント社への就職活動の真っ最中。ヴィジラント社は近々アメリカ資本に買収されることが決定している会社だし、前の会社をリストラされたと告げる中年男の主人公アレックスを一発で（？）採用する社長もどことなくいい加減な感じ……。日本やドイツではこうはいかないはず……？ すべてにわたってこれがフランス流なのか……？ そして、主人公はなぜこのヴィジラント社に就職を……？

不可解な主人公の行動。しかも主人公は病気……？

映画の前半から中盤にかけての主人公の行動は、不可解なものが多い。そして、

この主人公は「寡黙」だから何を考えているのか、何をを目指しているのか、容易にわからない。就職が決まった後は会社のすぐ近くのホテルを1カ月間予約……？ 立入禁止、掃除禁止を厳命した部屋の中は新聞の切り抜き等の資料でいっぱい。うえ、1人パソコンに向かって何かの作業を……？ また、逆さまにぶら下がった状態での腹筋の鍛練等、一般人離れした運動能力を示すかと思えば、なぜか膝を痙攣させて苦しんでいる……？ さらに回想シーンでは脳内撮影をしたMRIフィルム(?)が登場して、これを見れば明らかに何らかの障害が……？ このようなナゾに満ちた主人公の行動は、その個性的な人物像に興味を持たせていくのに十分な内容となっている。

フランス人は個性的！

日本人の最大の特徴は、何といっても横並び。これは良く言えば「和をもって尊しとなす」だが、悪く言えば「護送船団方式」となる。昨日6月14日付の夕刊で一斉に報じられた、「マイケル・ジャクソン被告無罪！」という陪審員の評決には驚いたが、良くも悪くもアメリカ(人)は民主的……？ これに対してアメリカと仲の悪い(?)フランス(人)の特徴は、一言で言えば「個性的」……？ ちなみに、ドイツ人は「頑固」……？

この映画に登場するアレックスはもちろん、現金輸送会社であるヴィジラント社で働くアレックスの先輩・同僚たちは、みんな個性的！

人物像あれこれ

興味深いアレックスの先輩・同僚たちの人物像を少し紹介してみよう。第1は、葉っぱ(つまり大麻……?)常習者のイタチ(ジュリアン・ボワッスリエ)。勤務中こんなものを常用していれば、日本の現金輸送会社では即クビとなるはずだが、フランスはその点自由……？

第2は、窓際族(?)でいつクビになってもおかしくないと思われる初老の男ベルナール(フランソワ・ベルレアン)。これが意外とケンカに強く、また意外と闘争的。したがって現金輸送車がガキ共(?)に襲われた時はリーダーとして大奮闘し、見事にこれを撃退したのはご立派……。

第3は、終始何となく変わった雰囲気をかもし出しているジャック（ジャン・デュジャルダン）。ラストに向けてこの男の役割が大きくなるから、要注目！

2人の女優は？

この映画には前述のようにアレックスの同僚としてさまざまなパーソナリティをもった男優陣が登場するが、女優の登場は2人だけ。その1人は、女だてらに（？）男社会のはずの現金輸送車の警備員という仕事につき、ライフル銃を持ってその仕事に励んでいるニコル（クロード・ベロン）。さて彼女がこの物語において現実に果たす役割は……？

そしてもう1人は、ホテル住まいを続ける謎の男アレックスに興味を示す（？）ホテルの従業員の女性イザベル（オーレ・アッティカ）。1カ月の長期滞在契約をしたアレックスが、「部屋の掃除は不要。絶対部屋に入るな！」とフロントに厳命したにもかかわらず、イザベルはある日、勝手にアレックスの部屋の中に入って……？ そんなイザベルとアレックスとの仲（？）も、フランス流で面白い……？

さて、総合評価は？

この映画は95分と短く、シンプルによくまとまっている。そしてたしかに主人公をはじめとする登場人物たちの人物像は個性的で面白い。しかし、ストーリーの組み立て方は単純だし、ラストも何となく後味の悪いもの……？ もっともこれが、良くも悪くも「フレンチ・フィルムノワール」なるものの特徴なのだろう。

2004年4月にフランスで公開されたこの映画は、またたくまに50万人を動員したうえ、ハリウッド大手のパラマウントがそのリメイク権を獲得したということだから、それなりのヒット作であることはまちがいない。しかし、何ととっても日本人には馴染みの薄い作り方の映画であることもまちがいないため、果たして日本でのヒットは……？ 大阪ではナナゲイ（十三にある第七藝術劇場）だけの上映であることも、その現状を端的に示している……。

2005(平成17)年6月15日記